

バーンアウトとリアリティショックの トランスアクション的な関係の検討

○岡本 響子¹ 岩永 誠²

¹天理医療大学医療学部 ²広島大学大学院総合科学研究科

問題と目的

新人看護師が就職直後に感じる基礎教育と臨床の現実とのギャップは、リアリティショックと言われ、新人看護師のストレスサーとして認知されている（日本看護協会，2005）。就職後のネガティブなリアリティショックの認知には、学生時代の情緒的消耗感の高さが影響を及ぼすことや、就職後の情緒的消耗感や個人的達成感の低下には、ストレス対処やソーシャルスキルの媒介はさほど示されず、リアリティショックが直接影響を与えていることがわかっている（岡本・岩永，2016）。先行研究から、リアリティショックが情緒的消耗感に影響を与えていることはわかっているが、情緒的消耗感がリアリティショックの認知に影響を与えている可能性も考えられる。そこで本研究では、3回のパネル調査を実施し、分析に交差遅延モデルを用いることで、バーンアウトとリアリティショックのトランスアクション的な関係の検討を行うことを目的とした。

方法

調査対象者：卒業を控えた専門学校3年生と大学4年生 調査時期：実習時として2011年1月～3月、病院に就職後の6月～7月・9月～10月の計3回。
分析対象：3回の調査に協力が得られた114名。就職前は看護学実習時を想起させた。

測定尺度：①新人看護師のリアリティショック尺度（岡本・岩永，2016）。ネガティブ3因子（生活の変化・看護の実践・職場の人間関係に関するギャップ）、ポジティブ3因子（新人教育・患者・家族との関係・就職後の満足感に関するギャップ）の6因子から成る。②日本版バーンアウト尺度（田尾，1995）情緒的消耗感・脱人格化・個人的達成感の低下の3因子より成る。本研究では情緒的消耗感に焦点を当てる。

分析方法：①情緒的消耗感とリアリティショック尺度各下位因子の相関分析と、②情緒的消耗感とリアリティショックの下位の因子について、交差遅延効果モデルに基づいた共分散構造分析を実施した。

結果

情緒的消耗感とリアリティショックネガティブ因子の下位因子では中程度の相関から強い相関が（ $r=.31\sim.53$ ）認められたが、ポジティブ因子の下位因子では、全体に相関が低く（ $r=-.05\sim-.39$ ）トランスアクションが成立しない可能性が考えられた。3ヶ月時のリアリティショック下位因子と6ヶ月時の情緒的消耗感においても、ネガティブ因子では中程度から強い相関が認められたが（ $r=.37\sim.55$ ）、ポジティブ因子とは全体に相関が低かった（ $r=.05\sim.41$ ）。共分散構造分析の結果、リアリティショックのネガティブ因子では、生活の変化に関するギャップ（GFI.10, AGFI.96, RMSEA.00）（図1）、看護の実践に関するギャップ（GFI.99, AGFI.93, RMSEA.07）でトランスアクションが成立した。職場の人間関係に関するギャップ（GFI.99, AGFI.96, RMSEA.02）では成立しなかった、ポジティブ因子はいずれも当てはまりがよくなかった（GFI.98, AGFI.85～.89, RMSEA.11～.14）。

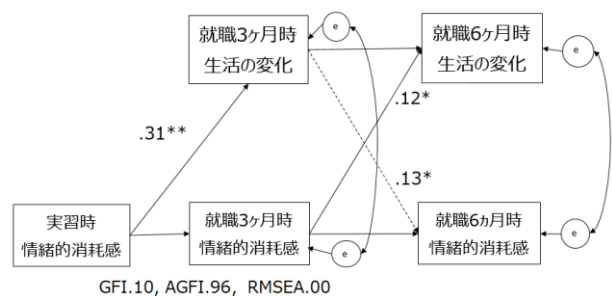


図1 情緒的消耗感と生活の変化に関するギャップのトランスアクション

考察

情緒的消耗感が原因となりリアリティショックに影響することがわかった。即ち、実習時の情緒的消耗感の高さが就職後の生活の変化、看護の実践に関するギャップの認知に影響し、リアリティショックを敏感に感じることで、就職後の情緒的消耗感が高まる。情緒的消耗感が高まるために、次にやってくるリアリティショックに対しても敏感に評価してしまうという、互いに関連しあって反応を増強しているトランスアクション的な関係があると考えられる。